
ハチャメチャ四人組のお宝探検隊

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハチャメチャ四人組のお宝探検隊

【Nコード】

N4542H

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

タイトルどおり、懐かしい「ズッコケ三人組」シリーズのオマージュです。名作を汚すな！というお叱りは覚悟の上ですw広い心で楽しんでいただければ、と思います。中学生、小学生の読者を想定して書いていますので、平易な言葉を意図的に選んで使っています。

第一章 かくれんぼでの発見

「おい、ゲンキ。そりゃあなんだ？」

店先の棚に入荷したバナナを並べていた国原元太が不思議そうな顔で聞いた。

「え？これ？ちよつと使うのさ」

リュックサックに真っ黒な衣装らしきものを入れながら、小学校から帰ってきて、即座に外へ飛び出したのは国原元気、小学校四年生の男の子だ。父親にカバンに入れていた黒々とした物体を怪しめた元気は、適当にフガモガ言つて誤魔化^{ごまか}して、一緒に遊ぶ約束をしていたクラスメートの栗原明の家へと駆け出した。へへ、こいつは今日の秘密道具なのさ。午後の空は白い入道雲におおわれ、飛び行くわたり鳥の群れが目に入った。

「アキラ、行こうぜ」

元気が呼び鈴すら押さず、明の二階建ての家の前で大声で呼ぶと、通りに面した二階のベランダに明が顔を出し、上から三分の一ぐらいの板チョコが降ってきた。

「腹が痛いからトイレに行くからちよつと待っててくれ」

そう叫んですぐに姿を消す。元気は仕方なくパクパクと板チョコをほお張りながら、持っていた小型ゲーム機の Nintendo DSを取り出してポケモンのゲームをしながら待つ。肌はよく陽に焼け、体は小柄だが、いかにも運動神経の良さそうな感じだ。大きな瞳とくっつくのない顔をしている。少し待つと、

「すまんゲンキ、お待たせ」

と言いながらアキラが出てきた。あいきょうのある顔立ちで、いつも笑っている男の子だ。全体的に横に広い顔かたちで、三度の飯より落語や漫才が好きな子だ。だが、そのギャグセンスはイマイチ、

と言うのが周りの評価なのは本人にはさぞ残念な事だろう。

「オーちゃん待ってるかもしれないぜえ」

「オーちゃんなら一時間ぐらい待たせても普通に待ってるだろ」

二人は急ぎ足で、牛松大の住む高層マンションに向かう。彼らの住んでいる大木市花森町は都会からやや離れたベッドタウンだ。ベッドタウンとは、都会へ通勤する人々が住むために開発された町のことだ。元々はかなり古い歴史を持っているのだが、近年は人口が増加し、それに伴って大きな新築のおしゃれなマンションが立ち並びようになった。そんなきれいなマンションの一つ、クリアライフ花森に、二人が誘いに向かっている牛松大が住んでいる。

「いつ来てもあの管理人のハゲ爺はうつとうしいな」

ゲンキがぼやく。腕白坊主そのものの小学生が、よく磨かれた玄関フロアを泥まみれの靴でドンドン入っていくので、管理人はいつもしかめっ面で睨んでしまうのだった。エレベーターに乗りこみながらゲンキがつぶやく。

「ツルッパゲの頭に油性のマジックでウンコの絵でも書いてやりたいな」

「いや、後頭部にもう一個別の顔を書くんだ。そしたら前にも後ろにも顔！」

そう言って二人が笑い転げているうちに、目的地の九階に着いた。さすがにマンションではゲンキも声を張り上げるわけにはいかない。素直にインターホンを押して、「オーちゃん、来たぞ」と呼ぶ。わかったー、と返事があつて、しかしたっぷり三分は待った後、ゆつくりとドアが開いて大きな体の色の白い少年がのっそりと出てきた。顔立ちは優しく、体重は人並みを遥かに超えていそつだ。おつとり、遅い、おおらか、おく病者など、それらの頭文字をとったあだ名が「オーちゃん」なのである。みょう字に牛の字が入っていて、確かにウシを連想させる子だ。

「お待たせえ。それじゃ、行こうね」

三人はクリアライフ花森を出て、すぐ側の坂道を上り、視界に見

える小津後山へと続く檜やブナや杉などの木々が生い茂る山道を歩いてゆく。夏が近く、木陰は涼しいとは言え、さすがに三人から汗が吹き出る。

「あちい。いよいよ夏って感じたな」

「ジューズ買ってくればよかった」

人一倍汗かきのオーちゃんはそう言いながらポケットからハンカチを出して顔の汗をぬぐった。

が、それは長くは続かず、やがて、横に抜ける雑草の生えている脇道を行くと、伽藍造りの門を構えたお寺に辿り着いた。門は開いており、朽ちた門扉は押すとグギギーツと悲鳴を上げる。お寺を囲う土塀もあちこち剥がれている。いつからかわからないが、ゲンキがものごころついた時から既に無人の廃寺なのだが、一向に取り壊される事もなく、放置されたままだ。

「おお、待ったぜ」

そこにはクラスメートの吉井達也たち五人が待っていた。このところのゲンキたちのマイブームはこの廃寺でのかくれんぼだ。日が暮れるまでひたすらこの広く隠れる場所が至るところにあるお寺で探しあうのが逆に楽しいのだった。

「よし、さっそくジャンケンで鬼を決めるぞ」

八人なのですぐ決まらないので、二人一組でジャンケンし、最後に負けたものが鬼になる。まず、オーちゃんが鬼になった。入り口付近に立っている巨大な楠の木でオーちゃんが五十数える間にみんなは思いおもいの場所に身を潜める。蚊がすごいので虫除けスプレーは欠かせない。

ゲンキは、早速朽ち果てた本堂の中へ一人走り、リュックから例の大きな黒い物体を取り出し、頭からすっぽりかぶった。そして、本堂へ上がりこみ、前もって外せるように仕込んでおいた床の板を外し、床下へ潜り込む。よし、完璧だ。これで絶対に見つからない。黄金パターンの誕生だ、イッヒヒ。オーちゃんが大きな声でもういいかい、と言っている。

「もういいよー」と人一倍大きな声で言った。ここならば死んでも見つかるまい。それに、この黒衣装をかぶっていれば、声を頼りに床板をはがれてもまず見えないだろう。この黒衣装は、ひよんなこととで手に入った。母親がある日持って帰ってきたものだ。ゲンキが母ちゃんその黒い服は何？と聞くと、

「お母さん今度は黒子をする事になったのよ。その時使うもののなのと教えてくれた。母の久美子は趣味で市が主催している演劇サークルに入っている。黒子と言うのは舞台の準備などをする役目らしい。

「お客さんにおおっぴらに見えるとまずいからね、こうしてすっぴり着込むのよ」

と言いながら本当にはおつてみせる。頭の部分には忍者のような半透明のすだれのような物がついている。

「あれ、これじゃ結局顔は見えちゃうんじゃないの？」

「そうよ。だって全部隠したら前が見えないじゃない」

そう言われて、ゲンキはそんなものか、となんとなく納得したものだ。お父さんはこの時いなかったたので、ゲンキの持っている黒づくめの物体が何か分からなかったのだ。

みーつけた、と言うオーちゃんの嬉しそうな声がなんとなく聞こえた。上の本堂で誰かが捕まったらしい。少しだけ隙間がある板敷きから、細く光が差し込んでいる。暑い。ゲンキは体温が二度ぐらい上がったような気がしてきた。もうすぐ七月なのに、厚い生地の上長袖長ズボンに全身包んでいるのだから当たり前だ。しまった、暑さは計算に入れてなかったぞ。だんだん意識がもうろうとしてきた。しかし、ここから出たら鬼に見つかってしまふ。見渡す限り真っ暗だが、少し向こうには光の差し込むところがある。そこから風が吹いてくるので、その前に行くことにした。中腰でそろそろと歩いてると、不意にチュチュツ、と声がした。思わずぎょっとして後ずさりする。どうやらネズミが住んでいるらしい。

どうやら、風通しを良くするための格子窓のようだ。外からも中

が見えるので、ゲンキはそこに斜めに座り、見つからないようにする。ふと、手元に何かが当たった。なんだろう？それはちょうどカバンの取っ手のような形だ。少し力を入れて引っ張ってみる。ズズズ、と言う感触と共に、割とあっさりそれは取れてしまった。光に当ててみると、竹細工のかごのふたに見える。

「なんだあー……？」

地面に目を凝らしてみると、ランドセル程度の大きさのかごの中に、何かが数個入っているのが分かる。試しに一つ取り出してみた。小さな望遠鏡のような形をしたものだ。土で汚れているが、赤の大地に色々な模様が入った布で巻かれている。覗いてみると、薄暗い中でも、キラキラした七色の宝石のようなものが光っているのがある。

「なんだっけ？まんげきよう、だっけ」

ゲンキはそれを箱に戻し、他に手に取れるものを取ってみた。今度は本だ。格子窓に寄って開いてみる。随分古いらしく、漢字がづりになっていて、一文字も読めない。ゲンキは他のものを探す。次に、七福神の小さな像があった。その次には、小さな銅貨が入っていた。見たことも無い硬貨なので、これが何なのかわからない。とりあえずポケットに入れることにした。その時、

「あゝ、こんなところにゲンキくんがいる」

格子窓の向こうでオーちゃんが微笑んでいる。しまった、見つかった！黄金パターンを獲得したと思ったのに……。ゲンキは急いで埋まっている竹かごにふたをして、板敷きを外し、本堂へ飛び上がった。なんだか久々にシャバに出たような気分だった。クソ暑い黒子の衣装を脱ぎ、リュックにしまい込む。次のゲームが始めるぜー、というアキラの声のほうへ向かった。もうゲンキはさっきのかごのことは忘れ、新たな隠れ場所を頭に思い浮かべているのだ。

第二章 お宝の地図！？

「ようキヨウジュ、今日学校終わった後用事あるか？」

キヨウジュと呼ばれた少年が読んでいた本から顔を上げる。牛乳びんの底みたいな分厚いレンズのメガネをかけている。色は白く、いかにも理知的な顔をしている。

「ん、家帰ってからもこれの続きを読もうと思ってるけど」

と、声をかけたゲンキに持っている本の表紙を見せる。タイトルは「月の秘密」となっている。

「あー、そうか、じゃあさ、ちょっと一緒に見て欲しいものがあるんだよ、帰り一緒に帰ろうぜ、すぐ済むからさ」

「いいけど。放課後の話だね」

教室に休み時間の終わりを告げるチャイムが響き渡る。ゲンキはおうよ、と返事して自分の席へ戻った。ここは花森第二小学校四年二組だ。ゲンキと、アキラと、オーちゃんと、そして先ほどのキヨウジュと呼ばれた子はみんな同じクラスだ。キヨウジュの本当の名前は^{おおつき}大槻賢一。だが、外見があのでUFO批判で知られる大槻教授と似ていて、みょう字も一緒に、おまけに父親は本当に大学の助教授なので、ついたあだ名がキヨウジュなのだ。読書や勉強が三度の飯より好きで、昨日のような外での遊びにはほとんど参加して来ないが、ゲンキらとはほどよく仲良くしている。担任の万田先生がたまにで教室に入ってきた。

「よーしゃ、次は国語の時間か」

言うが早いか授業をはじめ。髪型はオールバック、常に茶色のグラサンをし、首から金のネックレスをぶら下げ、黒いジャージか白いジャージに身を包んでいる。どうみてもヤクザそのもので、あだ名は「万田組長」である。しかし、風貌こそ怖いが、よほどのいたずらや忘れ物をしないかぎり絶対に怒る事はない。放課後も町をパトロールするような子供思いの先生である。もっとも、そのせい

ではしば町のチンピラどもとバトルになっっているようだが。

「じゃあ、牛松、四十五ページから立って読め」

「はあい」

オーちゃんがつそりとイスをひいて立ち上がり、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を朗読しはじめた。そのスローモーさはあたかも子守唄のようで、アキラが思わず船をこぎ始めたところ、目の前に万田組長の姿を発見し、即座に目を覚ました。

授業中、ゲンキは昨日の事を思い出していた。廃寺で見つけた銅貨を、何の気なしに晩ご飯のときに両親に見せた。

「なんか字が書いてるな。寛永…かんえいつうほう？」

「すごいじゃない、江戸時代の年号よ、寛永って言ったら」

「え？じゃあ、売ったら高く売れるの？」

ゲンキがただでさえ大きな目をさらにぎよるつかせて聞く。

「うゝん。飯の後でインターネットで調べてみるか」

と言った後、お父さんはビールとさし身を食べ、パソコンのある部屋にゲンキを連れて行き、グーグルに「寛永通宝 価値」と打ち込んで検索した。すると、美品ならおよそ千円で買い取ってもらえるとわかった。

「おお、でかした元気。これ磨いて古銭屋に持っていけば千円もらえるぞ。ガハハ。で、どこで見つけたんだこれ」

ゲンキは一瞬本当の事を言うか迷った。言えば、何か大事なものを取られてしまうような気がした。

「あ、あの、帰り道に拾ったんだ」

「えゝ。本当か。まーいいや。今度の休みの日にでも売りに行くか。それとも、記念にとっておくか？」

ゲンキは迷って、とりあえず僕が持つとくよ、と言ったら、お父さんはホイッと胸元に寛永通宝を投げて笑った。それを握りしめてゲンキは自分の部屋に戻り、今日見つけた本堂の床下に埋めてあった箱の中身を思い出していた。万華鏡と、七福神っぽい小さな像と、

古びて読めない本と、まだ他にもあったつけ。その時ちょうどオーちゃんに見つかってふたを閉めて出てきたんだったな。ひよっとしたら、他にも何か価値のあるものがあるかもしれない。よし、明日もう一度行ってみよう。テレビを見ながら、ゲンキはそんなことを考えていたのだった。

オーちゃんのかな朗読はまだ続いていた。

「見事に荒れ果ててるなあ」

キョウジユが廃寺の本堂を首を上げてぐるりと見渡し、呟いた。開け放たれている木戸から見える中庭も雑草とゴミで溢れかえっている。

「ここから降りれるんだ。待つてろよ」

と言つてゲンキはひつpegした床板を横にどけて中へ入っていった。入ってくる時のお寺の名前をキョウジユは思い出していた。元伏寺、げんふくじ、か。本堂には取り立てて何も残っていない。ただ、古いざぶとんだのが散乱しているのみだ。近くでうぐいすの鳴き声がした。

「おい、キョウジユ、これ取ってくれ」

床下から声がする。キョウジユが両手でようやくもてる程度の大さの土まみれの竹かごを受け取ると、ゲンキもジャンプして上がってくる。

「これかい、お宝が眠っている宝箱は」

「へへっ、たぶんな。開けてみてみようぜ」

ゲンキがキョウジユのみを誘つてここに来たのはひとえに彼がもの知りだからだ。それで、今日はアキラとオーちゃんは来ていない。「この竹造りのかご自体はそう古くなさそうだね」

と言いながらキョウジユが取っ手をつかんでふたを開けた。午後光の中のなら、何が入っているか全て分かる。ゲンキが一つずつ中身を取り出していく。

「これさ、読める？ミミズが踊ってるみたいな文字なんだけど」

と、昨日も開いた古い本を取り出す。年季が入っているところのシロモノではない。

「読めないね。でも、中世日本史を教えているお父さんなら読めると思う」

キョウジユのお父さんは大学で昔の日本の歴史を教えているらしい。なら、古い言葉も当然知っておかなくてはいけないので、読めるかもしれない。

「おっ、他にも銅貨があるある」

底のほうにあと数枚、いずれも見たことのないような古銭があった。ゲンキがホクホク顔でポケットにしまいこむ。キョウジユが一つの巻物のようなものを取り出した。紐で閉じてあるので、結び目をほどき、開いてみた。ほこりがすごく、二人はウホゲホとせきこんだ。最初のほうには案の定ミミズがのたくったような文が書いてあり、その後には地図のような絵と、どこかの山の絵が描いてある。紙の色は黄ばみ、さらに灰色がかっていて、何百年も前のものじゃないか、と思える。

「キョウジユ、なんだろうこれ」

「わからないな。何かの場所を示してるんだろうけど」

キョウジユはふと、山の絵の下のほうに、どこかで見た文字を見つけた。かろうじて読めるそれは、漢字で「元伏寺」と書いてある。

「ゲンキ、ここは確か元伏寺、だったよね」ゲンキはきょんととして「え？そうだった。俺ちよつと見てくるよ」

言うが早いか、門のほうに駆けて行く。そして、すぐに戻ってきて、そうそう、元氣の元、俺の字に、あとイと犬の字があったぜ、と報告する。

「やっぱりだ。じゃあ少なくともこの地図はこの近辺の事なんだ。でも、これ以上はわからないな。持って帰ってお父さんに読んでもらおう」

キョウジユは丁寧に本や巻物のほこりをはらいはじめた。

「でもさ、別にこれが宝の地図かはわからないよ。古銭が見つかつ

ただけでも良かったじゃない」

「え？おお、うん。いや、ひょっとして何か凄いものが入ってるんじゃないかな、と思ったただだからさ」

キョウジユがランドセルに本類をしまいこみ、ゲンキが残りの物を全部リユックに放り込み、二人は元伏寺を後にした。

「今日お父さんに見てもらって、明日報告するよ」

「おう、ぜひ頼む」

そう言って二人は別れ、それぞれの家路へとついた。

「お父さん、見て欲しいものがあるんだけどもいいかな」

夕食後、書き物をしていた大槻弘明、上陽大学文学部史学科の助教授は、ノックして入ってきた息子が、手になにやら古びた本を持ってきているのを目を丸くして見た。

「なんだい、それは。ずいぶん古い書物だな」

「ある場所で発掘したんだけど、読めないんだ。お父さん読める？」
発掘、と言う言葉をまさか小四の息子から聞くとは、と内心苦笑しながら、渡された一冊を見てみた。題名に「精化法華経要綱集」とある。

「仏教関係の本だぞ。うはー、こりゃ江戸時代ぐらいのものだ、すごく貴重な書物だよ。資料として価値があるなあ、ふむ、ふむ」

と、弘明は目を輝かせた。おそらく法華宗のお坊さんが独自に書いた物だな、と目星をつけた。江戸時代には印刷の技術が普及していないので、本は基本的に書き写すか、自分で書くかしかなかった。夢中になって読み込む弘明に、息子の賢一は、この巻物を先に見てよ、とせかした。弘明は本を閉じ、巻物を開いた。両手を広げきらなくても開ける程度の長さだ。読み込むうちに、弘明の顔色が変わった。

「お父さん、何が書いてあるのさ」

賢一がじれったそうに聞く。弘明は顔を上げずに聞いた。

「賢一、これをどこで発掘したんだ？」

「うん、あのね、小津後山に入る途中にある元伏寺って言うつづれたお寺の地下、と言うか本堂の床下」

弘明はうなずき、すり落ちたメガネを指で上げた。

「本当かどうかわからないけれども、書いてあることが事実なら、これは宝の地図だよ」

賢一は口をあんぐりあけた。そして、ゲンキの勘が当たった、と思った。この後すぐに電話してやらねば、とも思った。

第三章 いざ突入

じりじりと太陽が肌を焦がす。花森小学校にも夏休みがやってきた。そんな7月の終わりごろのある朝、ゲンキ、アキラ、オーチャン、キョージユの四人は朝七時ごろに花森公園に集まっていた。四人とも大きなリュックに、スコップやらアルミバケツなど仰々しく携えている。

「よし、全員そろったな。さっさと出発しないと日が暮れちまう」
言うなりゲンキはせかせかと歩き出した。

「本当に僕らだけで大丈夫かな」

と、オーチャンがぼそっとつぶやいた。途端にゲンキが目をむいてどやしつけた。

「今さら何言ってるんだよ。大人と一緒に面白くもなんとも無いし、それ以前に危ないとか言って行かせてくれなかったろ？」

だからこそ行きたくないんだよ、とオーチャンは言い返したかったが、そうするともっとゲンキが怒り出すだろうから、黙ってしぶしぶ歩きだした。

「大丈夫だよオーチャン、危ないところには俺も行かないし、いざとなったら逃げようぜ」

と、お調子者のアキラが肩を叩く。キョージユも苦笑して後に続く。キョージユの父親の大槻弘明が、あの後、詳細に地図を現代語に翻訳してくれた。その内容は衝撃的なもので、法華宗と言う仏教の一派の、日蓮王宗派に代々伝わる遺産を、金剛名山の洞窟の中に隠してある、と言う内容だった。弘明は、これはおよそ200年も前に書かれたものだから、とつくに誰かが運び出してると思うよ、と言って、翻訳した紙をひらひらさせながらキョージユに手渡した。そこには、県内にある金剛名山をどう歩けばその秘密の洞窟にたどり着けるかまで丁寧に書いてあった。弘明にしてみれば、まさか子供らだけで探検に行くなどとは露も考えていなかった。が、それは

甘かった。翌日その翻訳された紙を隅から隅まで読んだゲンキは、即座に探検に行く事に決めた。そして、当然のごとく残りの三人を誘い、特にしぶるオーちゃんに、実際に自分が手に入れた古銭は売れた、もつと見つけたらお前の好きなチョコアイスが食べ放題だ、と誘い、ちよつとだけ心が動いたオーちゃんもめでたく今朝探検隊に参加することになったのであった。

「お前らよう、親には嘘言ってきたよな？」

私鉄の花森南駅の改札に切符を通しながら、ゲンキは改めて確認した。

「ただ単に赤石連山にハイキングに行つてくるって言ったぜ」

アキラがガムを噛みながら言った。キョージユもオーちゃんも似たような返事をした。ゲンキは満足し、ホームに入ってきた電車に飛び込むように乗った。ここから電車で数十分揺られると、金剛名山のふもとの駅に着く。そこからはハイキングコースがあり、普通に歩いて三時間程度で頂上までたどり着くらしい、とキョージユが下調べしておいた。だが、今回の四人は頂上が目的ではない。

「途中にあるひなげし峠、と言うところで北西に進まないといけないみたい」

キョージユは言いながらリュックサックから方位磁石を取り出した。

「なるべく明るいうちに帰りたいね。夜だと遭難するかも」

遭難、と聞いて臆病なオーちゃんおくびょうは眉をひそめて、いやいやと言う風に首を振った。その様子がいかにもおかしくて、アキラとゲンキが声を上げて笑った。

「大丈夫だって。携帯電話も万が一のために借りてきたしよ」

と、ゲンキがポケットから最新の携帯を取り出す。親父のを借りてきたらしい。

「でも、何も無いのに通話に使ったらぶっ飛ばすとか言われたぜ」などと、和気あいあいと話しているうちに、目的の駅に着いた。

エアコンの効いた車両から降りただけでなんとなく疲れを感じた。

空は快晴で、まさに雲ひとつ無い。山の中は比較的涼しいので、それを目当ての登山客も多い。迷う事無く金剛名山へのハイキングコースを進む事が出来た。とは言え、真夏のさなかである。歩くだけで汗が落ちる。オーチャンは人一倍大きなリュックから銀色の水筒を取り出して、冷えた麦茶をガブガブ飲みながら、ヨタヨタと三人の後を続いた。キョージユも運動と名のつくものは全て苦手な男であって、手に持ったスコップがうとましく感じられてきた。一人名前のとおり元気なのはゲンキだけであって、面倒な石階段のような場所もスイスイと上っていつてしまう。そうして一時間も歩いただらうか、さきほどキョージユに教えられていた「ひなげし峠」とやらの分岐点にたどり着いた。だいぶ視界が開けた場所であって、振り返った右手には大きくパノラマのように先ほどの駅や線路や街並みが俯瞰ふかんできる。

「遅いぞ、お前ら、さ、ここからは道なき道だな」

ようやっとやってきた三人をせかし、キョージユに方位磁石を出させ、方角を調べさせる。

「こつちだね。この斜面を降りていくみたいだよ」

登山道を斜め横に降りていけないといけない。見ると、うつすらと獣道のような跡がある。

「あー、確かに過去には誰かが通っていたみたいだな」

アキラが言いながら、ヨタヨタとそちらへ踏み出した。後ろから歩いてきていたほかの登山客の視線を感じながら、四人はいよいよここからが探検の開始だ、と胸をときめかせた。

「本当にお宝があったらいいねえ」

オーチャンですらも顔をほころばせてそんな事を言っている。が、すぐにそんな余裕はなくなった。道がどんどん悪くなる。と言うか、10分も歩くと道は無くなり、背の高い雑草を踏み分けて進まなければいけなくなった。頭の両側は大木がそびえ立つ森だ。

「キョージユよ、このまままっすぐでいいのか？」

キョージユは片手に翻訳の書かれた紙をずっと持って歩いている。「うーん、と。まず川のせせらぎが見つかるまではずっと北西に向かえ、ってなってる。方角はまっすぐでいい」

「あ、ほんとだ。小川があるよ」

アキラの足元に小さな川のせせらぎがみえた。深さは無いけれども、かなり水の流れは速い。

「汗かいたし顔でもすすぐぜ」

そう言って四人は顔に流れる水をつけた。

「おお、冷たい」

そう言って喜んでいると、グエアー、ギエアー、と不気味な鳴き声が聞こえてきた。

「うへっ、何の鳥の声だよ、不気味だな」

ゲンキが思わず辺りを見回すと、少し先に、何かが並んでいるのが見えた。

「あれなんだろう」

オーチャンが言いながら、先に発って歩くと、それは何体かのお地蔵さんだとわかった。鬱蒼^{うつそう}とした森の中に、不気味に並ぶ古びてコケの生えた仏像は、四人に言いし得ぬ怖さを与えずにいない。

「げっ」

思わずアキラが声をあげた。足元に、首だけの地蔵が転がっていたからだ。キョージユが、それらを見て、翻訳の紙の説明どおりだ、と言っ

「川のそばの仏像を目印にさらに遡^{さかのぼ}って歩くと、小さな社^{やしろ}が立っているらしい。その裏に洞窟がある、と書いてる」

「よ、よし、行くぞ」

ゲンキがわざと唄を歌いながら歩き出した。ポケモンのテーマソングだ。それになんとなく勇気付けられた三人も続く。水のそばだから、涼しいので、歩くのが楽になった。そして、しばらく行くと、確かに何か小さな小屋のようなものが立っている。

「あれだ。着いたぞ」

「本当だ。洞窟がある……」

オーチャンが思わず息を呑んだ。小川のそばに立っている古ぼけた社の裏手は崖になっており、あたかも山自体が口を開けているかのようで、さしものゲンキもすぐに入る気にならない。アキラもこわごわ洞窟を見ていたが、突如入り口の上の部分に何かがいるのを見つけた。

「おい、ゲンキ、あれ、コ、コウモリじゃないのか」

「うはっ、マジだ」

見れば、確かにそれは小さなコウモリだ。数匹はいる。

「吸血コウモリだったらどうしよう。僕血を吸われるなんて嫌だよ」
オーチャンが今にも泣き出しそうな声で言った。

「うるせー、お前だったら少々吸われたって死にやしないわ」

「大丈夫、日本には吸血コウモリはいないから」

と、キョージユが宣言する。とは言え、門番のごとく洞窟の天井に鎮座しましている真っ黒な異形の生物を見ると、自然と足がすくむ。

「けっ、ここまで来て中も見ずに帰れるかよ」

と、ゲンキはリュックサックから懐中電灯とロープを取り出し、さらに小さなヤツケのようなものも出して、重装備で洞窟に単身踏み込んだ。

「待つてよゲンキ、俺らもいくよ」

と、三人もそれぞれ懐中電灯などを取り出し、後に続いた。

第四章 お宝の正体

ゲンキを先頭に、四人が洞窟をほんの少し入ると光が差さなくなつて、足元が見えなくなつた。小さな懐中電灯が頼りになつてしまひ、ゲンキはもつとでかいのを持ってくればよかった、と思つた。入り口の頃の天井はかなり高かつたのに、懐中電灯で照らすと、急激に低くなつてしまつた。

「足元気をつけろ、そうとうデコボコしてる」

とゲンキが言つた瞬間にオーチャンは足元をとられて転んだ。キー、キーと鳴き声が聞こえてなんとも不気味だ。

「コウモリつて鳴くんだね」

「招かれざる客の侵入を知らせてるのさ」

と、アキラがわざとオーチャンを怖がらせるために言つ。ひんやりとした空気も一層肝っ玉を縮こまらせる。洞窟の内部は一本道が続いている。

「キョージュよう、洞窟の中については何も書いてなかつたのかい」
ゲンキが大声を出して言う。息づかいなどで、お互いの存在を確認しあふ。

「特に何も書いてなかつたんだけど、ただ、勇気ある者のみが財宝を手に入れる事が出来る、つてあつた」

四人はその意味を考えてみて、少し沈黙した。ふと、アキラの懐中電灯の光が、洞窟の壁面を照らした。

「うおっ、うわっ！」

アキラは思わず叫び声を出した。そこには、鬼の形相、形容詞ではなく本物の鬼の顔があつた。

「うはーっ、なんだこれ」

ゲンキが思わず手で触つてみた。壁面に、幾つもの鬼やら般若の顔が彫つてあるのだ。

「こつちにはなんか女の人の顔があるよ、なんだよなんだよ」

キョージユも震え声で言う。反対側の壁面には能面のような顔が幾つも並んでいる。オーチャンは一切壁面に光を向けず、真正面だけを見ていた。

「前に、前に誰がいる」

少し歩く先に、広間のようになっている場所がある。そこに、確かに佇立する二体の人のような姿が見える。四人は思わず立ちすくんだ。

が、その二体はいつまでたっても動かない。

「へっ、正体は仁王像、つてとこかあ」

一人にじり寄ったゲンキがそう声を上げた。並んで二体、いかめしい顔の等身大の彫像が屹立^{きつりつ}としていた。ここは天井が少し高い。

「風が吹いてくるね」

キョージユが言う。風は奥のほうからやってくるようだ。すると同時にウオオオーン、と言うような、うなり声のようなものがかすかに聞こえてきた。思わず四人の金玉が縮み上がった。オーチャンは思わずアキラにしがみついた。声は合間を置いて聞こえてくる。

「ゲンキ、もしかしたら野良犬とかが住み着いてるのかも」

「へっ、犬ところぐらい、俺のヤツケでぶん殴ってやらあ」

とは言うものの、大きな野犬だったらどうしよう、とさしものゲンキも怖くなってきた。戻るなら今のうちかも、と思った時、鳴き声が止んだ。しばらく四人は二体の彫像の間に佇んでいた。

「ゲンキ、もう帰らないか」

アキラも怯えを感じていた。何か、ここから先へは入ってはいけないような気がする。

「ああ？ 今更帰れるかよ。お宝がまだ見つかってないじゃないかさ、行くぞ」

ゲンキが前に進みだしたので、三人もしぶしぶ続いた。それに、この雰囲気だと、実際にお宝があるような気もしてきた。洞窟は今度は下り坂になってきた。少し進むと、先が二手に枝分かれになっている。

「ありやー、道が分かれたな。困ったな」

言いながらゲンキは懐中電灯で奥をチラチラ照らしてみるが、どちらも深いようで、先は見えない。

「どうする？」

「とりあえず、どっちか行ってみるか……それとも二手に分かれるか？」

「どっちに行くにせよ、ここからはロープをつないでいこう。道に迷うかもしれない」

キョージユの提案で、足元のでっぱった岩にロープをしっかり結び、先頭のゲンキがそれを持ち、四人そろってまずは右手に入っていく事にした。すると、足元が濡れはじめた。

「地下に泉でも湧いてるのかもしれない」

「ドラクエみたいだな。で、地下に魔物が！」

と、アキラがおどけてみせたが、妙にリアルな感じがして、他の三人は生唾を飲み込んでしまった。しばらく行くと、また大きく開けた場所に出た。そして、予想は当たり、そこには地下水が溜まっている泉が存在した。そして、行き止まり状態で、どこにも進めない。

「しょうがない、戻るか」

「うわあっ、あ、アレ見る！」

アキラの懐中電灯の光の先には、とぐろを巻いた大きな蛇がいた。こちらを睨みつけ、舌を出しているのまで分かった。四人は動けない。まさに、ヘビに睨まれたカエル状態になってしまった。しかし、やがてキョージユが気づいた。

「まて、みんな、あれも石像だ。全く動かないだろ？」

そう言われて、はじめてアキラが懐中電灯の光を動かしてみた。なるほど、反応は無い。

「どうなってんだよ、この洞窟。まるでお化け屋敷じゃねーか」

ゲンキがブツクサ言いながら、ロープを伝って元来た道を歩き出した。オーチャンも賛同する。キョージユは、翻訳に書かれていた

「勇気ある者」の意味を考えていた。元の分かれ道のところまで戻り、左側のほうへ入る。こちらはほとんど狭くなる。左右に、何か燭台しょくたいのようなものが置いてある。あたかもどこかへ向かう通路のようだ。天井もどんどん低くなる。また風が吹いてきた。同時に、ウォォーンと言う嘆きのような声も聞こえてくる。

「みんな騙されんな。あれは、風の吹き加減で岩がなってるんだ」と、ゲンキが宣言した。三人も、そういうことにしておいた。そうでなければ生きた心地もしない。やがて、ますます道は狭くなり、そして曲がりくねりだした。幸い、四人は小学生なので通路が狭くなくても問題は無い。もう洞窟に入って30分は経っただろうか。ゲンキの照らす懐中電灯が、また何かを照らし出した。

「な、何かぶら下がってやがるぞ？」

視線の先に、天井から何かが紐でぶら下げられている。まさか、人か？アキラは想像しただけでションベンちびりそうになった。

「つつつ、作り物さ、そうに決まってる」

キョージユが殆ど祈るような想いでつぶやいた。目の前の洞窟はまた開けたのだが、その広間の入り口に、首吊り死体のようなものが通せんぼするかのようにぶら下がっているのだ。もしも、一人で来ていたならゲンキすらも絶叫して全速力で逃げていたに違いない。だが、四人でいたことが、互いの安心感と、無様をさらせない、と言う空気を作っていた。四人は本当に恐る恐る近づいた。そして、そのぶら下がりが、ガイコツが服を着ているものだ、と言うところまでわかった。本物に見えるのだが、本物だったら恐怖の絶頂なので、四人は即座に精巧な偽者だ、と断定した。

「趣味が悪いぜ、こ、ここに宝隠した野郎はよ」

ゲンキはかすれ声でそう言いながら、ガイコツを手でよけて広間に懐中電灯を照らした。空間はそこで完結していた。行き止まり、つまり、ここがこの洞窟の最深部らしい。アキラらも、なんとかガイコツをよけて内部に来た。オーチャンの懐中電灯が何かを見つけた。

「あそこになにかあるよ。石？」

四人が集まると、そこに1mぐらいの高さの石碑があった。何か文字が書いてある。が、古語らしく、全く読めない。キョージユはなんとか読める文字は無いかと必死に目を走らせた。

「自：しゅう：駄目だ、もうわからない」

キョージユはあきらめて、ゲンキに携帯を出すように言った。

「携帯なんかどうするんだ？まさかここで電話するの？」

「違うよ、カメラで画像に収めて帰るんだよ」

ああ、なるほど、とゲンキはポケットから携帯を出してキョージユに貸した。何回もシャッターを押して、ゲンキに返す。

「お父さんに見せたらきつと解読してくれる」

「でもよ、そしたらここに來たのばれちゃうよ」

オーチャンが細々と言う。

「へっ、無事に帰ってきたならもういいじゃん。それより、もうここで行き止まりだなあ」

「たぶんね、僕ら手に入れたよ、財宝」

キョージユはそう言ってニヤリと笑った。三人は意味が分からなかった。まあ、帰ってからの楽しみ、と言われ、四人はおっかなびつくりもう一度釣られたガイコツを押しつけ、一路洞窟の出口へと向かって歩いていった。洞窟を出たら、とてつもなく世界は明るかった。空は相変わらず青く、太陽は熱を放ち空に君臨していた。

エピソード

「んで？どういう意味だったんだよ」

次の日、キョージユに呼び出され、ゲンキ、アキラ、オーチャンの三人はクリアライフ花森のキョージユのマンションに集合していた。ちなみに、オーチャンも同じマンションに住んでいる。だから二人は自然と仲良くなったのだった。昨日、あの後家に帰ったゲン

キは、携帯の画像をキョジユの家のPCにメールで転送し、その画像をキョージユの父の大学助教授の弘明が読解しているはずだった。ゲンキもアキラもオーチャンも目を輝かせて返事を待っている。

「お宝の意味ってのはねえ」

キョージユは手元の父に翻訳してもらった紙を見ながら説明しはじめた。

「あの洞窟の奥まで入って行って、石碑に書いてある文章を知るところだったんだって」

「どういう意味よ」

「日蓮王宗って言う一派は、勇気があるお坊さんが説法しないといけないんだって。そのために、怖い洞窟に一人では行っていける勇気を持たないといけないんだって。いわば修行の一環なんだとさ」

「修行う！？」

「そのどこがお宝なのさあ」

「いわく、自分に勝てる者だけが仏法の真理に到達できる、と勝自到真　って文字が掘ってあったらしい。それがお宝」

ゲンキがフギムギ言いながら反論した。

「んじやなんでいちいちもったいぶった地図なんか作りやがったんだ」

「こつからはお父さんの想像だけど、若い弟子をだまくらかすためにわざと倉庫とかに置いてたんじやないかな、って。それで見つけた僕らみたいな若い修行僧が興味しんしんで探検に行くのが狙いだつたんじやないかなー、ってさ」

キョージユはそこまで言うとはうつとため息をついた。他の三人もがつくり肩を落とした。

「あんな怖い思いしたってのによ。骨折り損のなんとやら、だぜ」
「そうだよ、何がお宝だよ。アイスいっぱい買えるはずだったのにさ」

「ま、でもそれなりに面白かったからいいんじゃない？」

アキラは案外能天気になう言うと、立ち上がって窓の外を見なが

ら言った。

「本当のお宝は、いざと言う時友達がそばにいることさあ」
クサイ事言いやがって、と三人は笑った。今日も大空は突き抜け
た水色だ。ツバメが一匹、悠々と飛び回っていた。(終わり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4542h/>

ハチャメチャ四人組のお宝探検隊

2010年11月12日16時26分発行